

鶴居村立鶴居小学校 フィールド学習 実施内容

《概要》

[日程] 2018年10月19日(金)

[参加者] 3年生児童17名

[講師・案内] 国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部 治水課

[フィールド学習の目的]

- ・体験活動を通して、湿原についての関心と理解を深める。
- ・再び湿原に戻そうとしている取り組みを知る。

[実施プログラムの概要]

9:50 幌呂地区湿原再生事業地到着、オリエンテーション

9:57 模型を使った湿原に戻そうとしている取り組みの紹介

10:07 平成29年度 地盤掘り下げ箇所でのフィールド学習

10:38 平成24年度、25年度 地盤切下げ箇所でのフィールド学習

11:00 フィールド学習終了

《実施内容(記録)》

■幌呂地区湿原再生事業地到着、オリエンテーション(9:50)

○挨拶(北海道開発局 小澤 上席治水専門官、稲垣 治水専門官)

今日は幌呂という場所に来ている。この場所はもともと畑だったが、今湿原に戻す事を北海道開発局で行っている。泥炭は知っているだろうか。泥炭のことや、ここでどんな工事をやっているのかを今日は勉強してもらいたい。(スタッフ紹介、注意事項の説明)



■模型を使った湿原に戻そうとしている取り組みの紹介

今からここ幌呂地区という所で私たちがおこなっていることについてお話ししたい。

まずは釧路川についてお話する。釧路川は弟子屈町の屈斜路湖という湖から水が流れていて、太平洋という海に水が流れていく。その途中に、ここ釧路湿原があるが、皆さんは釧路湿原というとどんなことをイメージするだろうか。周りを見て見ると自然がいっぱいあり、釧路湿原とい



うのは緑豊かな場所で、様々な生き物が住んでいる。そんな釧路湿原だが、140年くらい前から、釧路湿原に食べ物を作るための土地をつくっていった。農地から出てくる水を流すための道を作ったり、曲がりくねった川を真っすぐにしたりもした。そうすると釧路湿原の大きさが

小さくなり、そこからさらに湿原に土や砂が入ってきたりして湿原の環境がどんどん変わってしまいました。そういう面もあり、私たちは現在、湿原の環境を守るために、また、本来の状態に戻そうという取り組みを行っている。

ここから模型を使って説明したいと思う。昔農地だった頃、牛や馬が食べる草よしが生えていた。この黄色い植物は外国から入ってきたオオアワダチソウという草。そういう草も沢山生えていた。皆が知っているタンチョウはそういう所には住まない。そこで、タンチョウが住めるような場所にしようという事で湿原に戻そうという取り組みを行っている。模型を見てもらいたい。模型の中で、緑色の草よし、黄色色のポツポツしているオオアワダチソウが生えている。昔の畑の状態を表している。この土地を、切り下げとって重機を使って 50cm くらい掘り、排水路と言って、農業をするために地下水位を下げるために掘られた水路を埋める。水路を埋めてしまうと地下水という土の下に入っている水の高さがじわじわと上に上がっていく。

もともと湿原に生えていたヨシなどの植物は、土を掘ったことによって太陽の光を浴び、さらに土の中の地下水の力も受けてどんどん成長していく。これが湿原の植生。皆さんが立っている場所も地盤を切り下げた場所で、今年の冬に工事を行ったところなので草はまだあまり生えていないが、時間が経てばこのように湿原の草が生えてくる。

湿原にみられる植物が生えてくるとタンチョウが住めるようになる。実は皆が到着する前に奥にタンチョウのつがい2羽いて、エサを取っていた。タンチョウが戻ってくることも大切なこと。この場所は、もともとは湿原だったが、一度畑にして、それが使われなくなったので再び湿原に戻すということを行っている。皆が立っている場所の下には、本当にこの模型のように地下水があるのか分からないと思う。それを確かめるため、これから実際に地面に穴を掘ってもらってどういう感じになっているか見てもらいたい。



■平成 29 年度 地盤掘り下げ箇所でのフィールド学習 (10:07)

○泥炭を掘り地下水を確認する

スコップで泥炭を掘ると、植物の遷移がからんで思いのほか掘りづらい。深さ 10cm 程も掘ると水が染み出し、足で踏むと染み出した水で泥炭が緩んでどろどろとした感触になっていく。植物が腐らずにそのまま残っており、これが湿原の土の特徴になっている。この土壌を泥炭と言う。なぜ腐らないかという、地下水、水があり気温も釧路は寒いので腐りにくく、そのまま残っている、森や林の中に行けば同じように葉っぱが毎年落ちて積もっているが、この様に腐らずに残るのではなく、葉っぱなどは腐って土になってしまう。湿原の方はこうやって腐らずに植物の根がそのまま残ってしまい泥炭になる。この泥炭は、毎年少しずつ増えていき、この下には 4m くらいの泥炭の深さがある。



○水溜りに魚を確認

泥炭の上にできた小さな水溜りに魚がいた。イバラトミヨという名前だったが、今は名前が変わってしまってトミヨ属淡水型と呼んでいる。どこから来たかという、この周りに農地の排水路、水を流す排水路があって大雨が降るとそこから水があふれてきて入り込んでくる。その時に取り残された魚が今このみずたまりの中に残っていた。



○事前に深く掘り下げた場所を確認

地面から 80cm 程掘っている。先ほどいたところでは地面から水が出てきたと思うが、この場所では地面から 30cm 程下のところに地面の下の水が流れている。泥炭をよく見ると植物の根や草が腐らずにそのままどんどん堆積していつている。釧路湿原の地面は 1 年間に 1mm ずつ堆積している。たった 1mm。皆は 1 年間に身長は何cm伸びるだろうか。釧路湿原は年間 1mm。1m 堆積するのに 1000 年かかることになる。

これから、500m程歩いて、5年から6年程前に地面を掘ったところを見に行きたいと思う。地盤を掘り下げて



6年経つと草がたくさん生えてきている。

■平成 24 年度、25 年度 地盤切下げ箇所でのフィールド学習 (10:38)

○フィールドの様子を観察

ここは湿原に戻してから6年経った場所。先ほどの場所が6年経つと、このように草が沢山生えてくる。この様な状態になるまでは意外と早く、3年や4年程で草が生えてきた。先ほど、湿原には1年で1mmずつ泥炭が積もっていくというお話があったが、ここはもともと湿原だったので、模型で見たように上の土をとってあげれば、またこうした湿ったところが好きな草が生えてくる。生えている植物の種類を紹介したい。先ほど、ヨシと言っていた植物があったが、イネ科でお米の仲間。



○排水路に棲む魚の観察

湿原の魚を皆に見てもらいたい。この水槽に入っている魚は排水路で捕った。ウチダザリガニは外国から来たもので、もともとは日本にはいなかったザリガニ。日本にいるザリガニと喧嘩するとウチダザリガニの方が強い。このため、ニホンザリガニが少なくなってきている。ザリガニが悪いわけではなく、持ち込んだ人間が悪い。こちらは先ほど見た魚と同じもの。昔はイバラトミヨと言っていたが、今は呼び方が変わってトミヨ属淡水型と言う。先ほどの水溜りで見た魚より元気に泳いでいる。本当は水が濁ったところを好み、隠れたいと思っている。上から鳥などに見つかったら食べられてしまうので、こういった隠れる場所がない所は本当は嫌だなんて思っている。これは湿原の中、温根内にもいると思うが、湿原を代表する魚。おじいちゃんおばあちゃんにはトンギョと言ったら伝わるだろう。皆の中でザリガニを食べたことある人はいるだろうか。(およそ半数の手が挙がる)ヨーロッパではこのザリガニは値段も高く、もともとは食べるために持ってきたもの。こうした外国から日本に来た生き物を外来生物と呼んでいる。



■おわりの挨拶 (11:00)

皆にはこれからも釧路湿原を大切に使って守っていただきたいと思います。